

短歌指導の試み

一 はじめに

短歌の鑑賞力とは、短歌に詠まれている事柄・心情を等身大に捉え、実感をもって消化することのできる力ではないか、と私は考えている。ある短歌について「私も同じ経験をしたことがある。」という感想を持つだけならば、自分の物語をその短歌に投影させ、自己完結することになり、短歌に詠まれている事柄・心情から逸れてしまう危険性がある。また、優れた鑑賞文が必ずしも優れた鑑賞力の表れではない、と私は考える。たとえば「望郷」「郷愁」などという語彙レベルの高い表現を用いて鑑賞したとしても、それに実感が伴っていないければただ言葉の使い手として本領を發揮するだけではないだろうか。

優等生的な鑑賞文にとどまらず、正面から短歌と向き合つて鑑賞力をつけるためにはどうすればよいか。これが昨年度の私の課題であった。一昨年の一学期に近代短歌の授業を行い、鑑賞ということの難しさを痛感したからである。鑑賞力をつけるためにはまず土台を築くことが必要なのではないか、と私は考えた。その土台とは、次の三つである。

浜中直子

- ① 様々な短歌に触れ、短歌に対する先入観を取り除く。
 - ② 短歌を鑑賞するための切り込み口を知る。
 - ③ 実際に短歌について考える場を持つ。
- 日常生活で短歌に触れる機会はそんなに多くないため、「難しい」「古臭い」などという先入観を持つのは不思議ではない。その先入観を取り除くためには、今まで出会ったことのないようなものも含めて様々な短歌に触れることが必要である。又、短歌を紹介して「さあ、考えてみよう。」と言われても、舵取りの指針のようなものがなければ、生徒は困ってしまうだろう。考える糸口があつてはじめて、短歌の深層部にまで目が向けられるのではないだろうか。

二 「The 短歌」について

先に挙げた三つの土台は、単発的な活動では身につかないと考え、長期間かけて刷り込んでいくという方法を取ることにした。週に一回「The 短歌」というプリントを配布して、授業のはじめ五分間くらいで生徒に目を通させるのである。「The 短

歌」は短歌を毎回一首ずつ紹介し、その短歌についての鑑賞を加えたものである。「The 短歌」に取り上げる歌は、

- ・近代以降のもの
- ・できるだけ破格になってないもの

・一度読んでわかりやすいもの

にしほり、内容が偏ってしまわないよう注意した。また、男性の歌と女性の歌の割合はほぼ同等となるようにした。

鑑賞を加える際に注意した点は、

- ・あくまでも個人の意見であることを主張する。
- ・リズムや表記、助詞・助動詞、歌語など、幅広い視点から分析する。

・言いきってしまわず、生徒に考える余地を残すようにする。

・感覚的にならず、論理的に述べる。

である。サイズはB5版で、より生徒の興味をひきやすいように横書きにしたのだが、これは失敗であった。もともと縦書きである短歌の特性を生かしきれなかったのではないか、という反省が残った。四月二十一日から三月十七日までで全二十八号である。

継続の難しさを感じた。(資料A参照)

また、十一号、二十号の後に、「The 短歌 増刊号」として、生徒にも書かせる場を持った。その際に気をつけさせたことは、

- ・引用する言葉には「」をつける。
 - ・最低ひとつは歌中の表現を取り上げる。
 - ・感想を述べるだけでなく、分析する。
- ということである。書かせたものはいくつかを取り上げ、プリン

トにして配布した。(資料B参照)

三 短歌の授業①

九月八日に短歌の好き嫌いのアンケートをとった。予想通り五割が「きらい」と答えている。わけがわからない、難しい、古い、古典文法を使っている、などが主な理由であった。また、「俳句なら好き」「鑑賞は好きだが創作は嫌い」という意見もあった。このアンケートを参考にし、三学期の短歌指導にのぞんだ。

三学期に七時間使って教科書(教育出版「中学国語2」)に載せられている短歌の授業を行った。たとえば授業で斉藤茂吉の短歌を扱う日は「The 短歌」でも斉藤茂吉の別の歌をとりあげるようにし、より深く短歌を味わうための手がかりとなるように心掛けた。

授業計画

(一)期間 一九九九年 一月十二日～二月三日

(二)対象 広島大学附属福山中学校二年A、B、C組

(三)教材 「近代の短歌」

四 指導目標

- 1、三十一文字に表される作者の心情を的確に捉えさせる。
- 2、様々な短歌に触れることによって短歌に親しむ態度を育てる。

(五)指導過程 略

四 短歌の授業② 歌合という手段を用いて

三の授業を終え、より主体的な鑑賞活動ができるよう、歌合を行なうことにした。用いた時間は四時間である。

(一) 歌合の準備

歌合の活動を行う前に、まず歌合とはどんなものかということの説明をする。ちようど百人一首を覚えた後だったので、「しのぶれど」(四十番 平兼盛)「こひすてふ」(四十一番 壬生忠見)の二首を例に挙げた。それからの手順は次のようになる。

- ① 短歌プリントを配布する。(資料C参照)
- ② 四人グループをつくる。
- ③ 代表者を決めさせる。
- ④ 対戦班を発表する。
- ⑤ 題を五種類提示する。
- ⑥ 対戦班の代表者同士にじゃんけんをさせ、題の決定権を握る班を決めさせる。
- ⑦ 勝ち残った五人にさらにじゃんけんをさせ、勝った班から題を決めさせる。
- ⑧ グループで「歌合準備シート」を作成させる。(資料D参照)

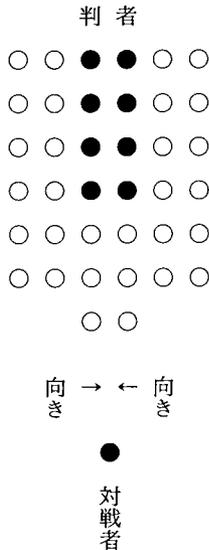
短歌プリントは六十六首の短歌を並べたもので、教科書の十首や「The 短歌」で取り上げたものと重ならないようにした。また、グループ編成は出席番号で決め、十班つくる。対戦班については二班対十班、二班対九班、となるようにした。五種類の題は

次のようになる。

- 二年A組 動物・水・恋・春・悲しみ
- 二年B組 言葉・花・恋・春・悲しみ
- 二年C組 葉・丸いもの・水・恋・言葉

「歌合準備シート」を作成する際には、選ばれた歌は随時板書して対戦班と重ならないようにした。この「歌合準備シート」をもとに、実際歌合を行う。

一戦は約二十分程度で行う。まず自分たちの班の選んだ歌を音読し、お互い自分の班の主張を述べる。それから対戦班に質問をしたりさらに自分たちの主張をしたりする、という形式を取る。判者と書記は次の対戦班の代表者が行うことにした。歌合をするときの教室は左のようになる。



歌合の最中、他の生徒は観戦する。判者は判定と判定理由を述べると同時に指示した。

(二) 歌合の実際

(一) 二年A組一班対十班の場合 【題 動物】

一班 遮断機のがりて犬も歩きだすなにごともなし春のゆふぐ
れ
小池 光

十班 猫を飼はば、

その猫がまた争ひの種となるらむ。

かなしき我が家。

石川啄木

この対戦は「犬」対「猫」という身近な動物の対決となった。一班は日常生活に在る存在としての「犬」だと主張し、十班は小さいものの象徴としての「猫」だと主張した。すると十班は「犬である必然性がないのではないか。」と質問をする。それに対して「一班は「遮断機」に対して猫では小さすぎ、またちよこちよと歩く犬の様子がここでは重要であるとし、犬の必然性を強調した。さらに十班は「春のゆふぐれ」という結句から、これは「春」のうたであり題の「動物」からずれるのではないかと指摘した。これに対して「一班は答えることができなかった。十班は歌合と題ということ常念頭においており、小さい「動物」が「争ひの種」となるからこそ、「かなし」と作者は感じるのだ、と捉えている。一班は「犬も」の「も」に着目しており、そこに作者の存在を見ているのだが、この「も」を、「人間という動物も犬という動物も」と捉えたならば、十班の指摘に反論できたのではないだろうか。判者の下した判定は一班の勝ちである。判定理由は「猫を飼はば」の歌は抽象的で意味がわかりづらい、とのことだつ

た。一班は「犬も歩きだす」というのを「ちよこちよこ」と形容したが、「猫を飼はば」の歌の方は「猫」の具体的イメージが浮かびづらいであろう。

(二) 二年A組四班対七班の場合 【題 春】

四班 くれなるの二尺のびたる薔薇の芽の針やはらかに春雨の降
る
正岡子規

七班 早春のレモンに深くナイフ立つるをとめよ素晴らしき人生
を得よ
葛原妙子

四班はただ単に「春」の情景描写ではなく「薔薇の芽の針」は幼い人間のたとえであると主張し、七班は少女から乙女への変化を「早春のレモンに深くナイフ立つる」で表現したのだと主張した。七班の解釈は私自身がはっとさせられるものであった。「をとめよ」という表現は「を止めよ」だと私は考えており、「ナイフ立つる」という動作に直接かかるものだと思ひこんでいたからである。それを七班に問うたところ、「早春のレモン」は少女期のことであり、それに「ナイフ立つる」というのは脱皮することを目指すのだという。そして変化を遂げた「をとめ」に対してエールを送っている歌なのだ七班は説明し、大人への過渡期だからこそ「素晴らしき人生を得よ」なのだと主張した。一字一句の重みを私自身が改めて痛感させられた解釈であった。

判定は四班の勝ちである。表現ひとつひとつが「春」をよく表現できているという理由であった。「早春の」の歌は初句がなけ

れば「春」を想起しにくい。が、逆に、「早春の」の五文字がこの歌において重要な役割を果たしているとも言えるのではないか。

(三) 二年A組五班対六班の場合 【題 悲しみ】

五班 アパートの隣りは越して漬物石ひとつ残しぬたみの上に

小池 光

六班 薔薇抱いて湯に沈むときあふれたるかなしき音人知るな

ゆめ

岡井 隆

この二班の解釈の特徴は、歌の背景を主観的に推測する傾向にあったことである。五班の場合は「大学生か何かがアパートに住んでいて、隣は親切な四十代くらいのおばさんで、よく漬物をくれた」という設定、六班の場合は「失恋して真つ赤な薔薇の花束を抱えて湯に入っている」という設定である。どちらとも根拠が無さすぎ、具体性にばかりとらわれていた。今回は観戦している生徒にも質問を出させることにしたが、意外なことに次々と手が挙がるのである。「どうして四十代だとわかるのか」「なぜここでの『薔薇』は赤だと思うのか」「失恋だと考える理由」などと推測に対する質問が続々と挙げられた。それに対する答えはどれも「だってそうでしょ」「薔薇といったら赤じゃない」「なんとなく」などと、個人の感覚によるものばかりであった。この二班は自分たちの中にある固定化されたイメージは絶対的なものではない、と気づき、他の生徒は短歌の解釈の多様性を気づくきっかけになる一戦であった。

判定は五班の勝ちである。六班はあまりに主観的な解釈であるという理由だったのだが、それは五班にもあてはまることであった。「アパート」「漬物石ひとつ」「たみ」「薔薇」「湯」など作者が具体的に表現したものを「どんな漬物石か」「どんな薔薇か」とさらに具体化していくのではなく、「作者にとつてそれらはどのような意味を持つか」あるいは「この歌にとつてそれらはどんな意味を持つか」ということを考えていくことが大切なのではないだろうか。

(四) 二年C組四班対七班の場合 【題 言葉】

四班 サキサキとセロリ噛みいてあどけなき汝を愛する理由はい

らず

佐佐木幸綱

七班 今しがた小鳥の巢より拾ひ上げし卵のやうな一語なりしよ

安立スハル

四班は歌全体を「言葉」の集まりであると捉え、リズム感のよさを主張した。七班は「一語」を「言葉」として捉え、四句目まへの形容によつて「一語」のイメージが膨らむことを主張した。また、最後の「よ」もその響きと文字の曲線によつて必要な「言葉」である、とつけ加えた。四班は、なぜリズム感がよくなるかを説明できず、ただひたすら音読したときのおもしろさを述べるだけであった。判定は緻密な分析をしているということで七班の勝ちである。

判定が下された後に、「サキサキとセロリ」が「バリバリと大

根」だったらこの歌はどのように変わってくるか、という問いをした。この八文字の音がリズム感をよくしている「要素であり、見た目にも軽快さと新鮮さが感じられるのである。」

ちなみに、同クラスの八班も【恋】という題で「サキサキと」の歌を取り上げており、へ一、二句でサ行音とカ行音がうまくみあっている。「サキサキとセロリ噛みいて」はさわやかな恋を表し、思いがだんだん加速して「汝を愛する」となっている。」と矢印をつけて解釈していた。

(三) 歌合を終えて

歌合を終えると、書記が書いたプリントを全クラス分印刷し、冊子にして配布した。(資料E参照)

今回、歌合の活動を行い、いくつか反省点が残った。まず、判定基準が曖昧だったことである。「わかりやすい短歌」をよしとするもの、「よく分析している班」をよしとしているもの、「題にかなっている歌」をよしとしているものなど、判定理由にはらつきがあった。あらかじめ判定の項目をいくつかあげておき、それをあわせて総合判断するようにすれば、より妥当性のある判定になっただろう。

次に、観戦している生徒も発言できるように初めからすればよかったのではないだろうか。そうすれば戦っている班も新しい意見によって解釈が深まるだろうし、クラス全体が授業に参加しようという意欲が持てたのではないだろうか。

また、一クラスにつき五回戦行うのだが、五回とも同じ形式な

ので単調になってしまったのではないだろうか。少しずつ形式やルールを変えた方がメリハリがついてよかったのではないか。加えて、題、あるいは提示した短歌の妥当性についても、今後さらに検討していく必要があるだろう。

五 おわりに

三学期の最後の授業でもう一度アンケートを取ったが、九月に取ったものと随分変化が見られる。「好き」が四割近く増えたというのは、短歌の授業を終えたばかりでその余韻があるのだろうと思うが、「どちらでもない」が十六・四%も減ったのは、それだけ短歌について考えるようになったからではないだろうか。

一年間「The 短歌」を通して様々な短歌に触れる機会を生徒に持たせ、あらゆる視点を提示してきたが、s音はやわらかい、ひらがな表記はやさしい感じ、という図式が私の中でも生徒の中でも固定化していく傾向にあった。そのため、今度はさらに「本当にやわらかいだろうか」と問いなおし、新たな視点を見出し、いかなければならない、と感じる。

「歌合準備シート」を作成する際、「葉」という題の班が「言葉」や「万葉集」は【葉】という題にあうだろうか、と質問してきたことがあった。そのような生徒の柔軟性を生かしつつ、短歌の鑑賞力をつけていける授業をこれからも心掛けていきたい。

参考文献

- 窪田章一郎・武川忠一 編 『現代短歌鑑賞辞典』東京堂出版
 木俣 修 『近代短歌の鑑賞と批評』明治書院
 高野公彦 編 『現代の短歌』講談社学術文庫
 岡井隆・佐佐木幸綱・坪内稔典・富岡多恵子・馬場あき子・
 藤井貞和 編 『現代にとって短歌とは何か』岩波書店
 小林恭二 『短歌パラダイス』岩波新書
 俵 万智 『短歌をよむ』岩波新書
 俵 万智 『あなたと読む恋の歌』朝日新聞社
 俵 万智 『チヨコレート語訳 みだれ髪』河出書房新社
 浅野 晃 編 『石川啄木詩歌集』白鳳社
 『与謝野晶子歌集』与謝野晶子自選』岩波文庫
 (岡山県立岡山一宮高等学校)

「The 短歌」で取り上げた短歌一覧 資料A

観覧車回れよ回想ひ出は君には一日我には一生
 ひねもすを乾かざる枝さしかはし組みかはしつ春の木われは
 はてしなきおもひよりほつと起きあがり栗まんじゅうをひとつ喰べぬ
 酒飲みのかつ 人生の先輩として先に酔う ちよつと失礼
 たとへば君 ガサツと落葉すくふやうに私をさらつて行つてはくれぬか
 あじさいの花の終りの紫の濡れびしよ濡れの見殺しの罪
 青梅に蜜をそそぎて封じおく一事をもつてわが夏はじまる
 サツカーボール転がり出でし 続くべき少年は来ず 秋の日の路地
 この恋は今日のあたりすすらんは下から咲いて下から枯れる
 タンポポの黄をきざみたることき陽よときにばからしくなる人生は
 しのび足に君を追ひゆく薄月夜右のたもと文がらおもき
 千六本うまきざみぬトントンとこんなよき朝われにあつたか
 雪ふれば仕事もとめて出寝ぎにゆくあが夫のシャツ凝ぎてをり
 秋の朝卓の上なる食器らにうすら冷たき悲しみぞ遠ふ
 夏ゆけばいつさい棄てよ忘れよといきなり花になる曼珠沙華
 断絶のよろこび石はふかふかと大雪のなかにうもれていたる
 花を挿すグラス曇りてわが内に昏く発酵する言葉あり
 胸のうちいちど空にしてあの青き水仙の葉をつめこみてみたし
 昼しづかケーキの上の粉ざたう見えざるほどに吹かれつつをり
 体温計くわえて窓に額つけ「ゆひら」とさわぐ雪のことかよ
 あかあかと一本の道とほりたりたまきはる我が命なりけり
 わが内の靴き部分を揺り出でて鱗ながく泳ぐあかき金魚は
 友がみなわれよりえらく見ゆる日よ
 花を買ひ来て
 妻としたしむ
 さうだ、あんまり自分のことばかり考へてみた、四辺は洞のやうに暗い
 傘ふかうさして君ゆくをちかたはうすむらさきつつじ花さく
 一度だけ本当の恋がありまして雨天の実が知っておりました
 めざめれば又もや大滝和子にてハープの絃に水かかくなる
 きみが歌うクロッカスの歌も新しき家具の一つに数えむとする

- 栗木京子
 岡井 隆
 岡本かの子
 石田比呂志
 河野裕子
 佐野木幸綱
 安立スハル
 小池 光
 俵 万智
 村木道彦
 与謝野晶子
 岩田 正
 石川不二子
 前田夕暮
 今野寿美
 加藤克己
 小島ゆかり
 前川佐美雄
 葛原妙子
 徳村 弘
 斎藤茂吉
 中城ふみ子
 石川啄木
 若山牧水
 与謝野晶子
 山崎方代
 大滝和子
 寺山修司

The 短歌

第20号

1988年12月15日(水)

休戚計(ハズカシキ)と云ふ「ゆひら」は「わが」の音のこまかい

材料が

この歌は、最初の「音のこまかい」によって「ゆひら」が「當だ」であることがわかる仕組みになっている。「休戚計をくわえて」いるため、うまく言えないのである。

ここで「休戚計くわえて」いるのは、おそらく恋人であろう。風邪がけで熱っぽい恋人が、舌を見てはしゃいでいるのである。恋人の扱いはまず、「くわえ」[讀み取り]と、身体の一部から捉えられ、最終に「まわく」という恋人全体のしくさとして描かれる。それに對して、恋人をみつめている作者の動作はまったく触れられず、「音のこまかい」はその音から、ひらひらと音が舞う情景を思い起こさせ、人行(ひき)によってやわらかい感じになるが、作者はそれを「當」と言い換える。「當」という音はかけ(入)りがあるため、響く、しつかりした感じになり、恋人と作者が対照的に表現される。また、「こまかい」という音は「まわく」は日本語表現によって、無れの弱まった恋人への親愛の情が生きて来ると思き出される。

この歌で描出したのは「恋」の存在である。ここでの「恋」とは、「當」が舞っているしんしんと来い(外)と、恋人と作者が二人でいるかたたか(内)を仕切るものでもある。そしてそれに、おそろく(外)に出られないのであろう恋人は熱っぽい「熱」をつける。その行動によって(外)の冷気を含んだ「恋」の冷たさと(内)にいる恋人の熱が抱きあひ、**「恋」は(外)と(内)をつなげる媒体となる。**そしてその「恋」から見たものは、二人の距離をさりげなく隔出する「ゆひ」であり、「音」なのである。

☆ 童謡・恋歌・雑詩文 人蔭堂！

雑詩文

The 短歌

(増刊号)

20

秋風を思ひ上る人、恋の存在には一日も欠けは一生

- 秋風を思ひ上る人、恋の存在には一日も欠けは一生
短歌によって伝え、その短歌を聞いた(見た)私は「すごい人」だと思ってる。

恋風を思ひ上る人恋の存在として表は贈る ちよこてん

- 人生の先輩として自分の人生をふりかえり、昔の自分を後輩としていつしよに酒をのんでるようにしている。

- ちよこてんと私という最後の言葉が、何に恋風なのかわかりにくけれど、自分は「知らない存在」が「恋風のかつ人生の先輩である作者」に對して見られているのだと思ふ。

かじいんの花の終りの葉の運れのしよん運れの先輩のま

- 「運れのしよん運れ」というところでは、「運れた」といっただけしか喜ばないよりも、より、その場面を強く思い起こされるのではないでしようか。(中略)私は、見たしに運れた、あじさいだと思ふけど、ななか、それだけではなくて、もっともっと大事なものが舞にあるんじゃないかなと思いました。

＊ マカオーネをめぐりまてし 風くまう少年はそふ 秋の日の露地

- 僕は秋くまう少年よりも秋くまう少年連のほうがいいかと思った。なぜかという、少年一人というのはなんもさびしい感じだが、少年連だとはさびしくない。そのさびやかなイメージから「あ」のむなしいイメージへの差があると、もっとさびしく感じながら、僕はいいなと思った。

- 想像してあよう。夕日をパワラに、鴉でボールとあたりを交互に見聞している中年男性(想像)を。しかし少年は来ない。想像はくびのびているはずだ。その想像が僕にさびしさを感じさせるのだろうか。

- これは私はや「短歌」ではなく、「見えない短歌」である。

